

みちのくの山と湯の旅

プロローグ・コロナ禍の中で

新型コロナウイルスのパンデミックで海外旅行のめどが立ちません。そんな中、不要不急の外出自粛が声高に叫ばれています。考えてみれば古希を過ぎたわが身そのものがもはや不要不急の存在です。この歳になれば、どうしてもやる必要のあることも急いでやらなければならないこともあります。不要なこと、無駄なことをぼちぼちやるのが年寄りの特権じゃないかと思ふやいてみたくありません。自粛を強要されるのもご免です。自分が自粛するのは勝手ですが、暗黙裡に周囲にも自粛を促し、逸脱することを「不謹慎」と評するような雰囲気醸成されてくると、へそ曲がりのわたしは「おいらには関係ないよ。先が

短いんだから好きなようにやらせてもらうよ」と居直るのが習性です。

またコロナウイルスは既存のインフルエンザより致死率が高く、とくに年寄りには危険なので、可能な限り感染を避けるべきだとの忠告も耳にします。しかしわたしは過去半世紀にわたる海外旅行の間に、肺炎、腸炎ビブリオ、腸チフス、A型肝炎、アメーバ赤痢などの感染症に罹ってきました。旅先の人に勧められるままに、手づかみでなんでも口に入れるわたしの不用心が災いしたのですが、旅を止めようとは思いません。感染症が怖くて旅はできません。

みちのくの山と湯を目指して

事情さえ許せば、いますぐにでも大好きなアフリカにでも飛び立ちたいところですが、飛行機が欠航になり、

訪問したい国のビザもおりないのではどうしようもありません。海外旅行がだめなら国内旅行です。そこで思いついたのが、東北地方の山と温泉を組み合わせた旅です。東北地方は例年ですと梅雨の入りが関東に比べて遅く、影響も少ないので、六月の初めに出かければ山歩きも好天に恵まれることが期待できます。

わたしは仙台で六年間、学生生活を送りましたから、おおよその土地勘はあります。東北地方には秘湯と呼ばれるような山奥の温泉宿がいくつもあります。しかし血を売ったり深夜の土木工事でするはしを振るったりして学費を稼いでいた貧乏学生のわたしにとって、温泉宿に泊まるなどということは夢のまた夢でした。旅行といえはヒッチハイクと野宿です。国道4号線の脇で友達が行く先を書いたおし

ろ旗を振って車を停めてくれたものです。泊まるのは神社の軒先、無人駅の待合室、畑の作業小屋などです。学校の宿直室に泊めてもらい、用務員のおやじに酒を飲ませてもらったときにはうれし涙が頬を伝いました。

あれから半世紀がたち、いまは自家菜園で育てたナスの漬物をつまみながら、特売の焼酎をちびちび呑めるぐらいの身分になりました。

高級宿は望みません。木造の二階建



てで、しかも浴衣ひとつで歩き回れるような安宿が好きです。憧れていたみちのくの山に登り、ひなびた温泉宿でのんびりできれば、コロナ鬱も解消されるでしょう。

十三日間の旅の概要

山梨のわたしの自宅を出発したのは六月十日です。公共交通機関の利用は避け、すべて自分の車を運転して回ることにしました。感染者が多い首都圏からの移動の自粛が要請されているので、宿泊先を予約しなければならぬほどの人出はないだろうと予測しました。しかし大まかな日程とコースは出発前に決めました。

とりあえず十三日間の旅の概要を示し、そのあとに、①十二湖と不老ふ死温泉、②岩木山と青荷温泉、③八幡平と藤七温泉、④秋田駒ヶ岳と乳頭温

泉鶴の湯、の四つのトレッキングと温泉について紹介します。

まず山梨の自宅から中央自動車道と長野道を使って長野の善光寺へ詣り、そこからさらに北上して戸隠神社へ参拝しました。戸隠神社は記紀神話に登場する「天の岩戸」が飛来し、現在の姿になったといわれる戸



鏡池から戸隠山を望む



奥社参道の杉並木

隠山を中心に発達した山岳宗教が源流と考えられます。ここで有名なのは樹齢四百年を超える杉並木です。平成二十二年秋に放映された吉永小百合さんのCM（JR東日本）の舞台として一躍有名になりました。

この杉並木の参道をニキロ口ほど辿った先に「戸隠神社奥社」があります。祭神は、天照大神が天の岩屋に隠れた時、怪力をもって天の岩戸を開き、天照を岩戸から引きずり出した天手力雄命です。参拝するには往復四キロを歩かなければなりません。まずはこ



戸隠神社参道入口

れからの東北の山旅の足慣らしといったところでしょうか、二日目は戸隠から一時間ほどのところにある長野県信濃町的小林一茶の遺跡を訪ねました。一茶が最晩年に住んでいた土蔵が残っており、彼の生涯や俳句を紹介した記念館もあります。また近くの野尻湖ではナウマンゾ

ウが発掘されており、湖畔の博物館には狩猟採取時代に食料を求めて湖にやってきた縄文人の石器などとも骨が展示されています。信濃町からは上信越自動車道と北陸自動車道を通って新潟に一泊しました。

三日目は鶴岡を経由して羽黒山（標高四一四m）へ登り出羽三山神社への参拝です。東北地方の山岳宗教の中心地として知られ、開山は古く推古元年（五九二年）といわれます。

参道は瑞心門から国宝の五重塔を通り、さらに二四四六段の石段を登



羽黒山 国宝・五重塔



羽黒山2446段の石段

らなければなりません。石段の数は神社では日本一です。前夜に大量に飲んだ酒の影響もあって、この石段の登りは想像以上につらく厳しいものでした。

四日目は松ヶ丘開墾場など鶴岡周辺の遺跡を見学し、日本海沿岸の港町・荘内へ。港の繁栄を示す山居倉庫、豪商本間家の屋敷などを見学しました。

五日目は五能線沿いに日本海沿岸を北上し、白神山地近くの十二湖を散策した後、不老ふ死温泉へ。六日目は

青森の名山・岩木山へ登り、ランプの宿として知られる青荷温泉に二泊しました。

八日目は十和田湖をかすめ、八幡平へ。宿泊は八幡平の山頂から少し下った標高約1400メートルのところにある藤七温泉です。

九日目はチングルマの群落に目を見張った秋田駒ヶ岳と乳頭温泉郷の「鶴の湯」です。ここでは二泊して静かな山の湯を堪能しました。

十一日目は田沢湖を経由して角館の街で武家屋敷の街並みを見学、さらに山形まで南下して芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蟬の声」の句で知られる山寺立石寺へ。

十二日目は蔵王を横断し東北自動車道で一挙に山梨まで戻ろうと思っ
ていましたが、運転が長距離にわたることや東北の旅の余韻を楽しみたい



那須・北温泉

ので、那須で途中下車、秘境の一軒宿の北温泉で一泊しました。北温泉は豊かな湯量に恵まれた大きなプールのような湯船があることで有名で、温泉

好きなら一度は訪れてみたい宿です。かくして十三日間の東北地方の旅はおおむね好天に恵まれ、総走行距離二千百五十六キロのドライブも無事に幕を閉じました。どこの観光地も人は少なく、通常では予約がなかなか取れないといわれる人気の宿も、当日予約でやすやすと泊まることができました。

十二湖と不老ふ死温泉

酒田からまだ雪の残る鳥海山を前方に眺めながら、本庄、秋田、能代と日本海沿岸を北上し、秋田県から青森県に入ります。十二湖と不老ふ死温泉があるのは青森県の南西の端にある日本海に面した深浦町です。

十二湖は世界遺産・白神山地の一角にあり、ブナの森に囲まれた美しい湖沼群です。江戸時代の大きな地震

によって山が崩れ、川がせき止められてできたといわれています。周囲をブナ林に囲まれ、自然の浄化作用のためにきわめて透明度が高いのが特徴です。



日本海沿岸をゆく国道101号線



いくつものトレッキングコースがありますが、二時間半ほどで周回できる青池・沸壺の池コースを歩いてみました。ビジターセンターに車を停め、中の池、落口の池、がま池、鶏頭場の池、青池、沸壺の池と七つの湖沼を巡りました。散策路は整備されていて、気持ちよく歩けます。

一番人気のある池は、コバルトブルー

ーのインクを流したような青池です。直径約三十メートル、深さ九メートル程の小さい池ですが、池の底の倒木が見えるほど澄んでいます。

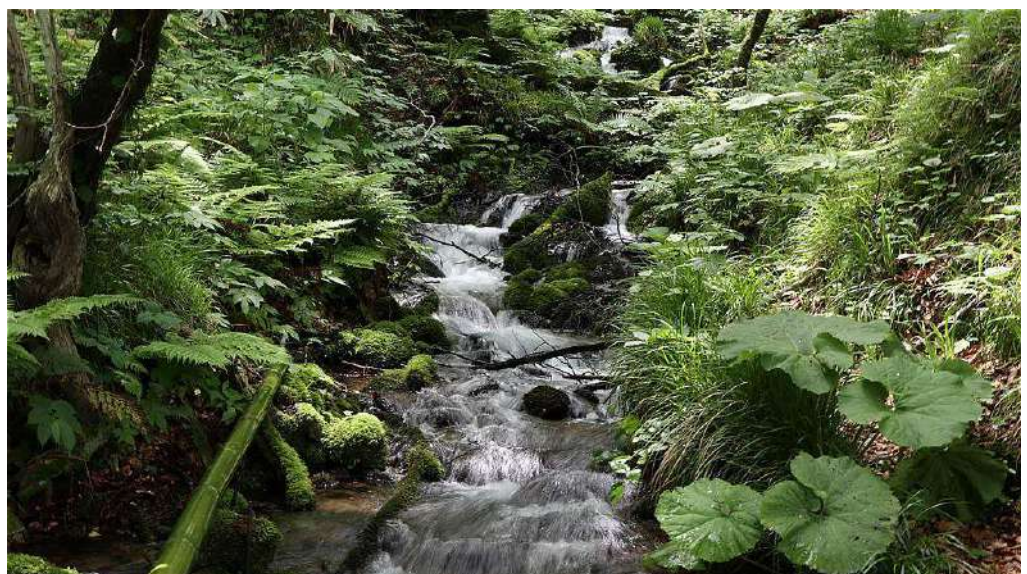


青池

なぜこんなに青く見えるのでしょうか。研究者によると、何か水に溶けて青いのではなく、高い透明度と水以外の不純物が極めて低濃度であるために、青い光を強く散乱するという水本来の性質が際立っているためだそうです。

十二湖にはもう一つ大きなウリがあります。それは平成の名水百選に選ばれた沸壺の池から流れ出す「沸壺池の清水」です。湧き水ですから口に含むと冷たく、さっぱりとした味があります。

散策路脇にある休憩所「十二湖庵」ではこの名水を使った抹茶をたてて観光客にふるまっています。残念ながらコロナ禍の影響ででしょうか、営業は中止中でした。水量は写真のように豊富ですから、地元産のどぶろくやビール生産にも利用されているよう



です。

さて、森林浴をしながらのトレッキングで、程良く良く汗をかいたところで今日の宿である不老ふ死温泉に向

かいます。十二湖のビジターセンターから国道101号線までは十分ほど、そこから黄金崎にある宿まで十五分ぐらいです。不老不死とはなんとも大仰な名前を付けたものですが、海を眺めながらのんびり湯につかっていれば健康に良いことは間違いありません。

実際は不老不死ではなく「不老ふ死」なのですが、不の文字が二回重なる縁起が悪いと学者に言われ、片方をひら仮名にしたといわれています。しかし、わたしの推測では、創業者はあまりの大仰な名前に気恥ずかしくなって一方をひら仮名にしたのではないのでしょうか。

とにかく、不老ふ死温泉の名物は日本海の波打ち際にある露天風呂です。この場所・黄金崎は古くから岩の間から温泉が湧いていて、地元の人たちは

岩盤を掘って湯船を作り、浸かっていたといえます。

これに目を付けたのが創業者の小宮山利三郎さん。現代技術を駆使すれ



ば、豊富な湯量が得られると踏んでボーリングしたところ、鉄分を多く含む茶褐色の湯が沸き出しました。

昭和四七年の開業当時は粗末な民宿並みの木造の一軒宿だったので折からの温泉ブームに乗って繁盛し、いまや秘境の湯宿とは思えない立派な鉄筋コンクリート造りの新館が建っています。

波打ち際の露天風呂は女性専用のものと男女混浴のものがあります。女性専用は外から見えないようにしただけで囲ってあります。湯の温度はわたしの体感で四十二、三度でしょう、ちょっと熱めで長湯には向きません。しかし海が荒れると、波がザンブリコと湯船の中まで入り込み、たちまちぬるくなるそうですが、そんな時に湯船につかっていられるものではないでしょうか。

宿にある温泉分析表によれば、含鉄



ナトリウム・マグネシウム・塩化物強
塩泉ということで、赤茶色の湯の色は
鉄分が酸化した時の色でしょう。ま

た飲んでみるとかなりしょっぱい味
がしますので、海水が混じっている
に違いありません。

この露天風呂から眺める日本海の
夕陽は天下一品だといわれています
が、あいにくの曇り空です。しかし波
は穏やかで、心地よい風に頭を冷やし、
海鳥の声と波の音を聞きながら入る
かけ流しの湯はなかなか味わえない
醍醐味です。他に客もいず、独占状態
でゆっくり楽しみました。

波打ち際の露天風呂だけでなく、本
館にある内湯からも日本海の絶景が
眺められます。

ところで黄金崎と言えば関東の人
間にとっては伊豆西海岸の黄金崎が
すぐ頭に浮かびます。駿河湾の向こう
に眺める富士の姿が美しく、また夕日
を浴びた岩が黄金のように輝くこと
から名づけられたといわれています。

ここも夕日で有名ですから、同じよ
うな理由から黄金崎と呼ばれている
のかと思います、宿の方に確認したところ
意外な事実を教えられました。

江戸時代に黄金崎善衛門という海
賊がこの地に勢力を張っていて、上方
と蝦夷地のあいだを往来した北前船
を襲い、金銀財宝を蓄えたといえます。





彼がいかに金持ちだったかを示す逸話として、黄金の「馬鍬」で田を起こしていたといわれています。その財宝が黄金崎に隠されているというのです。宝物が埋まっている場所は「朝日さす夕日かがやく岡の上に漆百樽黄金萬両」という謎めいた歌の中に示されています。

この伝説を信じて何人もの人がお宝探しにやってきたそうですが、実はこの宿の創業者である小宮山利三郎さんもそのひとりだったのです。彼は黄金は見つけられなかったけれども、黄金の湯を見事掘り当てたわけです。

黄金のロマンに酔い、酒に酔い、地元の深浦漁港で上がった魚の刺身で陶然としていると、「夕日が見えますよ」と宿の方が教えてくれました。西空の雲がいままさに割れて、赤い夕陽がちょうど海に沈むところです。

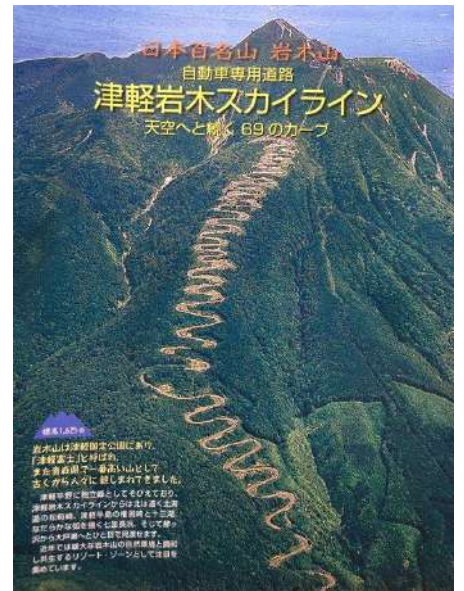
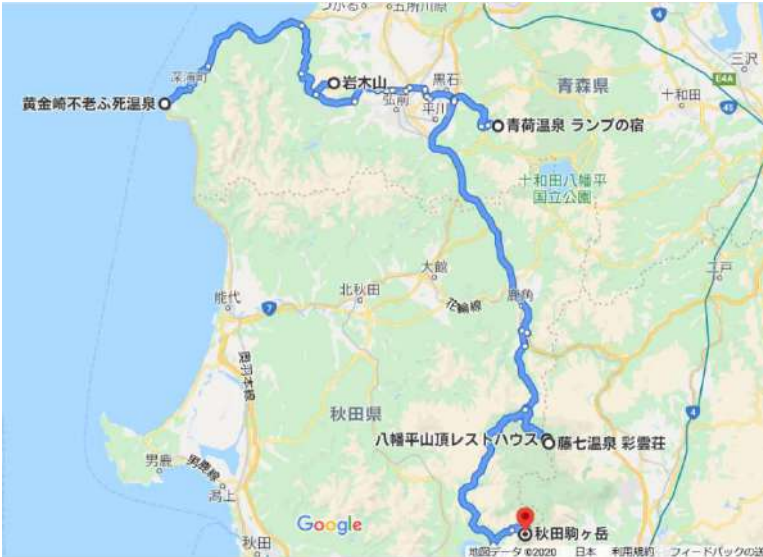
日本の夕陽百景にも選ばれた夕日を眺めながら、深浦町で生産されたコメと白神山地の伏流水で仕込まれた純米酒「白神の詩」をちびりちびりと傾けるのを至福の時といわずしてなんというのでしょうか。



岩木山と青荷温泉

不老ふ死温泉から岩木山までは、日本海沿岸を鯨ヶ沢町まで進み、そこから内陸部に南下するように進みます。距離にして約八十キロ、約二時間の行程です。

深浦町を出発するとき、空は厚い雲に覆われ雨もぽつぽつ降っていました。



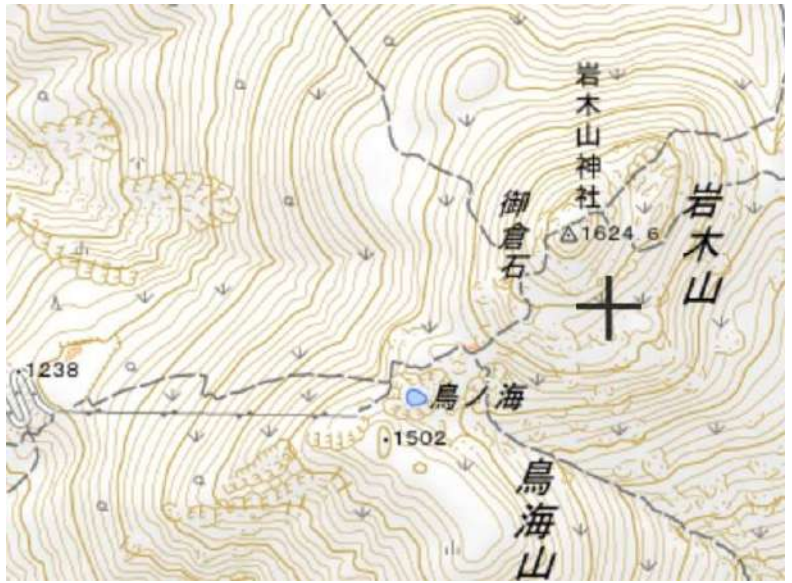
た。これでは今日の登山は中止かな、と思っていました。岩木山の八合目の駐車場へ着くころには青空が広がり、岩だらけの山頂がよく見渡せます。八合目の駐車場までは津軽岩木スカイラインという有料道路が伸びています。全長約十キロで、その間六十九のカーブがあり、ブナの天然林の間を縫って登ってゆきます。樹木が切り払われ日当たりのよくなった道路の両側はちょうど満開のタニウツギの花が埋めていました。

駐車場には数台の車しか停まって



八合目駐車場から山頂を望む

いません。本来ならこの駐車場からさらに九合目までリフトがあるのですが、コロナ禍の影響で営業中止中です。しかし駐車場が標高千二百五十メートルですから山頂（千六百二十五メートル）まで三百七十五メートルしかありません。国土地理院の地図を見てください。左端に車道があり、1238の標高が示されているところが駐車場です。ここから1502の鳥海山までリフトが



伸びていますが、今回はその上に破線で描かれている登山道を登りました。「鳥の海」という爆裂火口までは矮小化された背の低いダケカンバの林の中の登山道を登ります。

山梨など関東の山では広葉樹林帯の上にある亜高山帯に針葉樹林が見



ミチノクコザクラ

られるのですが、岩木山ではなぜか、モミ、ツガなどの樹種が見当たりません。比較的新しい火山だからでしょうか。登山道の脇には関東ではめったに見られないミチノクコザクラやベニバナイチゴが咲いていました。可憐な高山植物に癒されながら一



鳥の海噴火口

時間ほど登ると、「鳥の海」という噴火口のへりに出ます。右の写真は登山道からロープウェイの駅がある鳥海山の方を撮ったものです。赤い屋根の建物は鳳鳴ヒュッテといい昭和三十九年一月、秋田県立大館鳳鳴高校生五人が吹雪に巻き込まれて遭難、四人が命



鳳鳴ヒュッテ

を落とした事故を受けて作られた避難小屋です。

鳳鳴ヒュッテからは岩がゴロゴロした急坂を登ります。登山道というよりも大きな岩塊の間をよじ登っていくという感じですが、落石の危険もあり慎重さが求められます。「二のおみ坂」と呼ばれる難所ですが、おみ坂は山頂を拝める御見坂の意味でしょうか。

二のおみ坂を登り切り、三のおみ坂と呼ばれる最後の急坂にさしかかったあたりから山頂付近に急速に雲が



沸いてきました。しかも雲は左から右へともものすごい速さで流れており、山頂付近の風の強さをうかがわれます。日がかげると気温も急速に下がってきて、汗ばんだ肌が冷たく感じます。登山用腕時計の気温表示を見ると、十四度です。腕に巻いたままですから腕の体温の影響も考えれば、実際の気温はもっと低かったかもしれません。



山頂に着いたのは歩き始めて二時間です。標準コースタイムが一時間半ですから、年寄りにははまあまあのペースでしょう。

山頂には三角形のケルンがあり、その中心に「連帯の鐘」が下がっています。私の背中のところには「岩木山山頂」



岩木山神社奥宮と朱塗りの鳥居

のプレートがあります。

このケルンは地元の人たち約四百五十人が持ち寄った石と建築資材をリフト山頂駅から手渡しで運び、完成

させたものだそうです。石は岩木山の山頂付近の石を集めたものではなく、麓の津軽一円から持ち寄られたものだというから驚きます。落雷で倒壊した山頂標示塔に代わって建設されたといえます。

また山頂には津軽の地を見守るように鎮座する岩木山神社奥宮の祠もありました。写真右側に赤く写っているのは朱塗りの鳥居です。祠の中には真鍮製の大きな神鏡が祀られています。無事に登頂できたことに感謝し、無病息災を願って丁寧に拝礼しました。

岩木山は津軽平野のまん中にすそ野を広げ青森県の最高峰で、その山容から「津軽富士」とも呼ばれています。山頂からは、遮るものがない三百六十度の雄大な展望が得られるはずですが、残念ながら雲に覆われてなにも見

えません。そのうえ、風速二十メートルちかい強風が吹いていたのでは楽しみになっていた昼飯の弁当を開けることもできません。岩の間に隠れるようにあった三角点を確認して、早々に下山することにしました。



ご覧のように石ころだらけの道ですから、下りはさらに慎重を要します。浮石に乗ったり、躓いたりすると大けがをする危険性があります。

山頂から百メートルほど下ると、雲の中から抜け出し、視界も聞くようになりました。風も山頂の強風がうそのように穏やかになりました。三のおみ坂を下りきると再び青空が眺められ



ミヤマキンポウゲ

るようになり、ミヤマキンポウゲが風に揺れていました。

岩木山は津軽平野のどこからでも眺められる美しい山容から、地元農民に親しまれ崇拜されてきました。毎年旧暦八月一日には「お山参詣」という津軽地方最大の農作祈願祭がおこなわれますが、これは国の無形重要民俗文化財に指定されています。

太宰治が生まれ故郷の津軽を旅して書いた旅行記「津軽」のなかにこんな一節があります。

『「や！ 富士。いいなあ」と私は叫んだ。富士ではなかった。津軽富士と呼ばれてゐる一千六百二十五メートルの岩木山が、満目の水田の尽きるどころに、ふはりと浮んでゐる。実際、軽く浮んでゐる感じなのである。したたるほど真蒼で、富士山よりもつと女らしく、十二単衣の裾を、銀杏の葉を

さかさに立てたやうにぱらりとひらいて左右の均斉も正しく、静かに青空に浮んでゐる。決して高い山ではないが、けれども、なかなか、透きとほるくらゐに嬋娟（せんけん）たる美女ではある』

一般的に言えば山の形容は陰し



Ryuuichi Yoneyama さん撮影

いとか勇壮とかいうものでしょうが、あでやかでなまめかしい女性に例えているところがいかにも太宰らしいのではないのでしょうか。

岩木山を下山し、ランプの宿・青荷温泉に向かいますが、その途中の百沢というところに岩木山神社が鎮座しています。一の鳥居から見ると、岩木の山頂＝奥宮が一直線上に見えることが分かります。

岩木山神社の歴史は古く、岩木山の山頂に奥宮が建てられたのは奈良時代末期の宝亀十一年(780)で、今から



一の鳥居



岩木山神社楼門

頂の神社と共に岩木山神社と呼んでいます。

その後、岩木山神社は江戸時代に津軽藩の総鎮守とされ、歴代の藩主に篤く信仰され、保護されてきたため、今日まで高い格式を保ってきました。

丹塗り一色の二層の楼門は二代藩主信枚により寛永五年(1628年)に建てられたもので堂々たる風格です。本殿や拝殿と共に国の重要文化財に指定されています。

千二百年以上も前です。延暦十九年(800)年には征夷大將軍に任せられ蝦夷征伐にやってきた坂上田村麿が武運を祈って山頂の社殿を再建し、さらに山頂まで人々が参拝しに行くのが難しいだろうと、麓にも社殿を建立したといわれています。この麓の里宮を下居宮(おりいのみや)と呼び、山

この楼門の前で面白いものを見つけてきました。玉垣にしがみつくようにしている一対の狛犬?です。右側は頭を上、左側は頭を下にしています。わたしは数々の神社に参拝していますが、このような形の狛犬?を見るのは初めてです。制作年代も制作者も不明ですが、「玉垣狛犬」という形式があるそうです。



西本願寺の天邪鬼



岩木山神社の狛犬

しかし、私にはどうも狛犬には見えません。しかし顔つきには見覚えがあります。どこかの寺社のはずと思いをめぐらせていると、気が付きました。京都の西本願寺の御影堂正面にある天水受けのところには天邪鬼の顔とそっくりです。重い石造の天水受けを四隅の下で天の邪鬼が支えています。写真を見てください。顔が良く似ているでしょう。

西本願寺の天邪鬼は重い荷物を支える罰を受けている格好ですが、岩木山神社の天邪鬼がなぜ玉垣に取りついているのか分かりません。

さて、だいぶ寄り道をしましたが、そろそろ今日の宿の青荷温泉に向かうときです。岩木山神社から青荷温泉に向かうには弘前市内の中心部を通り抜け、国道102号線を十和田湖方面に進みます。四十五キ



ロ、一時間半ほどの道のりですが、最後は国道を外れ、舗装のない細い山道を六キロほど進むこととなります。自家用車ですとアクセスはさほど気になりませんが、公共交通機関を使うとなるとまずJRで弘前へ、そこからローカル線の弘南電車で黒石へ行き、路線バスで虹の湖、さらに一日四本ある宿の送迎バスを利用することになります。青荷温泉自体が弘南バスの経営ですから、他の山奥の温泉宿に比べれ



ばアクセスは恵まれているといえる
でしょうが、乗継が良い場合でも一日
がかりです。

青荷温泉は南八甲田の最高峰、櫛ヶ
峰を源流とする青荷溪谷の谷底にあ
る一軒宿です。湯宿の歴史は比較的新
しく、黒石市の丹羽旅館の次男であり、
歌人でもあった丹羽繁太郎が昭和六

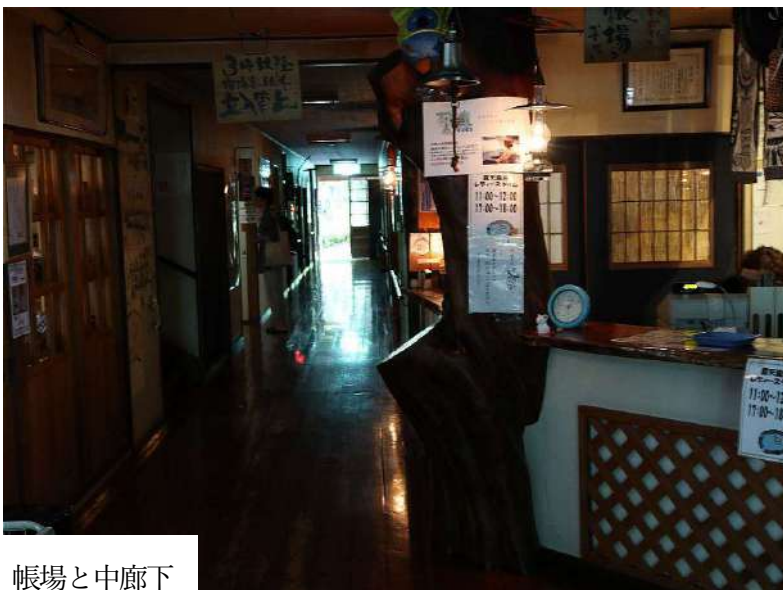
年に開湯したといえますからまだ九
十年ほどの歴史です。

青荷温泉の一番のウリは「ランプの
宿」です。玄関先から続く廊下、食堂、
湯殿、客室などの照明はすべてランプ
です。といっても電気が来ていないわ
けではありません。厨房は電気器具を
使っていますし、電気冷蔵庫もありま
す。また共有トイレには電球がぶら下
がっていました。

従って「ランプの宿」は、他の温泉
旅館と差別化を図り、ひなびた雰囲気
を盛り上げるための演出といえるで
しょう。おかし八代亜紀が歌った唄の
中に「あかりはぼんやり灯りやいい」
といった歌詞がありました。明るす
ぎるのは味気ないときもあります。ラ
ンプの灯心がかすかに揺らめくのを
眺めているところがなごみます。

また宿の周辺は放送局の電波も通

信会社の電波もとどかないため、テ
レビを見ることもラジオを聴くこと
もできません。携帯電話も繋がりに
せん。この温泉宿ではせめてせちが
らい世間の煩わしいことなど忘れ、
のんびりと過ごしてくださいという
ことでしょう。



帳場と中廊下

旅装を解いて、早速湯につかりに行くことにしました。青荷温泉には四つの風呂があります。まず宿の前の湯小屋にあるのが「健六の湯」です。湯船も床も含めて総ヒバづくりの建物で気持ち落ち着き、木肌が



健六の湯

わたしの素肌になじみます。天井は高いし、大きな窓からは新緑の緑の木々が眺められて、もはや恍惚の境地といえるでしょう。
湯は透明でほとんど無味無臭です。湯温はおよそ四十度ぐらいです。ほかに客とてなく、三十畳ほどの広い湯殿を独占状態ですから贅沢この上ありません。湯船のふちに寝ころんで、あふれ出てくるかけ流しの湯を背中に感じながら、小唄、都都逸をうなってみました。
ほかに客もないようなので、壁一つ挟んだ隣の女湯を覗いてみました。



女湯の方はヒバづくりの浴槽のほか、に五右衛門風呂のような「釜の湯」と露天風呂が付属していました。

健六の湯のほかには、青荷川にかかる吊り橋を渡ったところに大岩で囲まれた男女混浴の露天風呂と「滝見の湯」があります。また本館の中には男



女別の小さな内湯があります。
 すべての湯船でわたしの裸体をさ
 らすわけにもいきませんので、露天
 風呂はひと気なしの写真です。男女
 混浴ですが脱衣場は男女別の小部屋
 になっています。三方がよしずつに囲
 まれています。三方がよしずつに開
 かれており、せせらぎの音が聞こえ



滝見の湯

解放感があります。竹筒から豊富な湯
 が流れ込んでいますが、ここの露天風
 呂の湯も無色透明、無味無臭という点
 は健六の湯や内湯と同じです。しかし
 ほかの湯と比べてすこし温めです。宿
 の方に聞いてみると源泉が違い、こち
 らは天気によって違うものの三十七、
 八度ということ。八度ということ。八度

もうひとつ、滝見の湯を紹介してお
 きます。滝見の湯は混浴の露天風呂に
 向かい合って建つ建物の中に内湯、そ
 の外に露天を配して、竜神の滝という



小さな滝が間近に眺められます。滝は
 写真の中央奥に写っていますが、あい
 にく草の丈が伸びすぎて半分以上隠
 れてしまっています。

客室に戻って布団に横になりビー
 ルでも飲もうと、吊り橋を渡り本館の
 方に戻ると、従業員のひとりがランプ
 小屋でランプのホヤの手入れをして

いました。ランプのホヤといっても分らない方がおられると思いますが、ホヤは火屋で、つまり燈心を覆うガラス製の筒のことです。石油ランプですから、ススがガラスの表面に付着します。これを取り除いてガラスの表面を



毎日きれいに磨くことが必要です。三十五室ある客室も廊下も食堂も湯殿も、宿泊客が利用する場所はすべてランプだけの照明ですから、ホヤ磨きは従業員にとって大仕事といえるでしょう。

私の泊まった部屋は帳場の前の階段を上った二階にありました。天井からはランプが一つぶら下がっており、部屋の真ん中にちゃぶ台が一つあるだけの六畳間です。トイレや洗面所は部屋の中にはありません。

窓からは青荷川の流れと新緑の木々が見下ろせます。ヤマボウシの白い花が咲いていました。湯上りの火照った体を風が冷ましてくれます。せせらぎの音を聞きながら、布団に腹ばいになり、缶ビールをのどに流し込めば、「ごくらく、ごくらく」のつぶやきが図らずも口をついて出てきます。



青荷川

ところで、二階の一番奥の角部屋の入口に、絵と短い文章で綴られた「青荷日記」と題する横長の絵巻物のようなものが額装され、掲げてあります。よく見ると扉には「山谷芳弘青荷温泉画室」との小さな表札もあります。宿の番頭さんに聞くと、山谷芳弘さんは昭和十一年、地元津軽生まれの画家

で、たびたび青荷温泉に逗留して、多くの絵を描いていったそうです。「青荷日記」は前掲した「青荷温泉絵マップ」を描くために五日間逗留した時に描かれたものようです。単純な太い線でさらりと書かれています。津軽



の土地が持つ温かみのようなものを感じる個性的な絵です。

それまで気が付きませんでした。廊下のところどころには山谷さんの絵が飾ってあります。「ごくらく、ごくらく」のつぶやきが口をついて出てくるのはわたしだけではないようです。青荷温泉には二泊しました。私その他に泊り客は二、三組で、どこの湯も気

がねなく入れましたし、朝寝、朝酒、朝湯の「小原庄助さん」状態でのんびり過ごすことができました。



青荷温泉正面

八幡平と藤七温泉

青荷温泉で二泊したので、岩木山へ登った疲れも完全に取れました。再び国道102号線を南下し、みちのくの脊梁・八幡平を目指します。

途中、十和田湖の脇をしばらく走りますが、ブナの森の中の気持ちの良い道です。十和田湖は昨年秋に訪れたばかりですので、展望台に車を停めて、休憩しながら眺めるだけにしました。



八幡平までは宿から一二〇キロ程

で、約三時間の行程です。宿泊予定の藤七温泉は八幡平の見返峠からすぐ近くですから、見返峠のところにあるレストランの駐車場に車を止め、八幡平のトレッキングを二時間ほど楽しんでから宿に向かうことにしました。

八幡平は岩手県と秋田県にまたがる高原状の山の総称です。標高千五百メートルほどの高原のあちこちに火山の噴火で盛り上がった小さなピークが点在しています。また一万年前あたり起きた水蒸気爆発によって形成された火口に水がたまり、八幡沼やガマ沼、メガネ沼などのたくさん火口の沼や湿原が形成されています。

小説家であり登山家でもあった深田久弥は、昭和三十八年に出版した「日本百名山」の中で「八幡平の真価は、やはり高原逍遙にあるだろう。一



駐車場から見返峠を望む

枚の大きな平坦な原ではなく、緩い傾斜を持った高低のある高原で、気持ちのいい岱を一つ横切ると見事な原始



林へ入ったり、一つの丘を越すと思いがけなく沼があったりして、その変化のある風景がおもしろい」と書いています。

登山靴に履き替えて、早速高原逍遙に出発です。左の地図の中央下のところに「現在地」とありますが、八幡平



見返峠から駐車場を望む。正面はモッコ岳

アスピーテラインの駐車場で、レストハウスがあります。

ここから見返峠までは緩やかな登りです。見返峠から八幡沼まで下り、沼をほぼ一周してガマ沼を経由し、わ

ずかに登って八幡平の山頂に至ります。山頂からはなだらかな下りで、めがね沼、鏡沼を経由して元の駐車場に戻ります。

写真は見返峠から南の方を撮ったものです。残雪が多いのに驚きます。眼下に出発点の駐車場が見えますし、その向こうのピラミッド型の端正な山は「八幡平三大展望地」の一つモッコ岳（一五四一m）です。

一息入れるつもりで峠のベンチに据わり、何の気なしに下を見ると、ベンチの下に紫色のきれいな花が咲いています。首を伸ばして覗き込んでみると、なんとシラネアオイです。日光白根山に多く見られることから白根葵と名づけられました。山梨ではついぞ見かけません。絶滅危惧種に指定している県もあります。

見返峠には残雪はほとんど残って



シラネアオイ

いませんでしたが、八幡沼へ向かってアオモリトドマツの林を下っていくと、まだ分厚い残雪が残っていて、木道は完全に隠れてしまっています。しかし八幡沼の周辺には雪はありません。雪が解けたばかりの沼周辺の湿地にはミズバショウやコバイケソウの群落が顔を出していました。

八幡沼は日本で唯一のアスピーテ火山の火口湖で、八幡平のなかで一番大きな沼です。さらに八幡平山頂のすぐそばに位置するなど、名実ともに八幡平の代表的な沼といえるでしょう。



ミズバショウ

八幡沼からガマ沼にかけては、広い湿原が広がり、小さな池塘が点在しています。この湿原のあたりが雪解けが一番早いのか、春の高山植物をたくさん目にしました。なかでもわたしが大好きなハクサンチドリに出会えて



ハクサンチドリ

大感激です。高山に生えるランの仲間ではもっとも美しく華やかな花の一つではないでしょうか。茎の上部にたくさんついた花が千鳥の羽を思わせるのでこの名が付きました。花の先が鋭く尖っているのが特徴です。

山頂までは湿原から五十メートルほどの登りで、あっという間に到着です。山頂といっても、八幡平市で設置した「八幡平頂上」という山名標示柱と展望台がなければ、どこが頂上か分かりません。展望台の階段の前にある平たい石が二等三角点ですが、意識して探さないと見落としそうです。ここが八幡山や八幡岳でなく、八幡平であることがよく分かります。

展望台に登ってみましたが、アオモリトドマツの樹林が広がるだけで、いつも山頂で味わうような胸のすくような展望はありません。普段だと雄大



な展望を楽しみながら、缶ビールと昼飯といったところですが、早々に山頂を後にすることにしました。

この時期の八幡平には、ほかの時期には見られない名物があります。それは下山の途中にある鏡沼に現れるドラゴンアイと呼ばれる自然現象です。

鏡沼の雪解けの様子が、まるで竜の目の様に見えることから、こう呼ばれるようになったそうです。外国人観光客のSNSにより広められたのがき

っかけのようですが、例年なら観光会社が「奇跡の自然現象」などと称して大々的にツアーを組むほどの人気だそうです。

毎年五月中旬から六月中旬のうちのわずか二週間程度しか見られない自然現象で、その年の積雪量や雪解け状況、天候状況などで、見られる時期も見え方も変わるといいますから、実際に行ってみなければわかりません。

時期としては少し遅すぎますが、期待をしながら樹林の中を下ってゆくと突然、鏡沼の前に出ました。そして見事なドラゴンアイがありました。一番外側に青い沼の水面が輪を作り、その内側に白い雪が円弧状に水面を覆っている部分があり、さらにその内側に雪が解けた黒い水面が見える三重の構造になっています。



なぜこのような現象が現れるのでしょうか、私なりに考えてみました。まず鏡沼の構造ですが、周りを急な崖で囲まれた直径三十メートルぐらいの沼です。理科年表によれば水深は一番深い所で約九メートルです。恐らく

この鏡沼は、冬の間は氷結し、大量の積雪によって覆われてしまうのだらうと思います。とくに周囲の浅いところは崖から崩れてくる雪もあって中心部より暑く雪が堆積します。

春になると、すり鉢状の沼に周囲から雪解け水が流れ込んできて、水面が上昇し、さらに日光で雪の堆積が少ない中心部が解け始め、黒目にあたる水面が現れます。

また水深が浅い周辺部は周囲から流れ込んできた水や地熱が雪を溶かします。そこで現れるのが一番外側の青い水面です。真ん中の輪は一番雪の溶けにくい部分だと考えられます。

八幡平には鏡沼の他にもたくさん沼がありますが、ドラゴンアイが現れるのは鏡沼だけです。それは鏡沼が他の沼と違って周囲に急峻な崖を持っていることが原因だとわたしは

考えたわけです。

まあ、わたしのように何でも理屈で考えないで、「神秘的の絶景」に素直に感激していた方が良くかもしれませ

ん。
八幡平の最大積雪量は三メートルを超えるそうです。六月の中旬になっても、多くの残雪があることに驚きました。春の高山植物もいまが盛りです。

先に紹介したシラネアオイやミズバショウの他に、ショウジョウバカマ、イワナシ、ヒナザクラ、チングルマ、サンカヨウ、イワカガミ、ツマトリソウなどたくさんのおんなの花と同時に、目覚めたばかりの雪田植生、湿原植生にも出会うことができました。

深い残雪の森と雪解けの湿原、池塘群、そして雪解け直後の植生とドラゴンアイ。大満足の八幡平トレッキングでした。



岩木山

今日の宿である藤七温泉・彩雲荘は山頂レストランから少し下った標高約一四〇〇メートルのところにある一軒宿です。開湯は昭和三年で、発見した木こりの名前に由来すると宿の



後生掛温泉

お姉さんから聞きました。地図を開いてみると藤七沢という沢筋に位置しているのが地名由来かとも思いましたが、沢の名前が木こりの藤七さんから来ているとすれば同じことです。付近には藤七の他にも、八幡平地域の活発な火山活動を背景に、蒸ノ

湯、後生掛、玉川など昔ながらの湯治風景を残す温泉宿がいまも残っています。噴気や噴湯、噴泥などの火山現象が非常に活発で、珍しい火山景観を見ることができま。

最初の計画では御生掛温泉に泊まる予定でしたが、あいにく訪れた日は休館でした。コロナ禍で客が少なかったからでしょう。御生掛温泉の周囲には自然研究路があり、噴煙をあげる活発な地熱活動が見られます。

さて、藤七温泉の目玉は何といっても野趣あふれる露天風呂ではないでしょうか。自噴する豊富な湯量によってすべての湯船が源泉掛け流しです。泉質は湯の花により乳白色に濁った硫黄泉です。

河原の中に湯が沸きだしているその場所に湯船を作ったもので、五つの男女混浴用とよしずくに囲まれた女性



藤七温泉全景 バックは岩手山と雲海

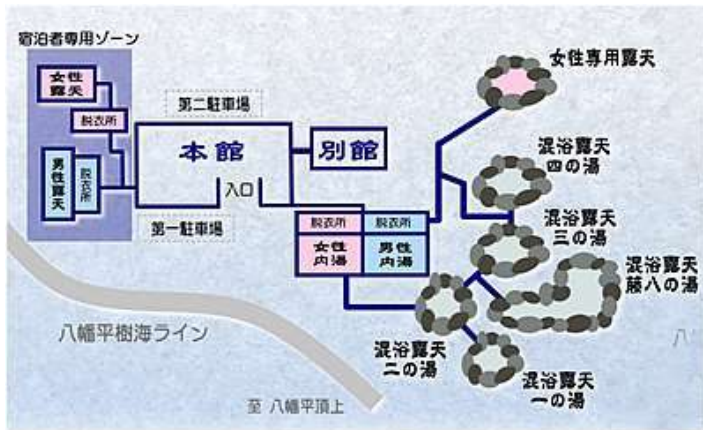
専用の六つの湯船があります。国立公園内の大自然に触れながら、湯に浸かれるとはこれ以上ない贅沢です。実際に朝はご来光と雲海を眺めながら湯

に浸かりました。

源泉の温度は九十二度と高いのですが、広い湯船に溜まっているうちに山の冷気に冷やされてちょうど適温になっています。湯船の縁は木製ですが、底は基本的に細かい泥のままです。地下深くの粘土が地下水やガスな



どとともに地表に噴出し、堆積したもので、塩分やミネラルが豊富なので肌の若返りに効能があるといわれていますが、効果のほどは分かりませんが、



藤七温泉内湯

藤七温泉を語るには、露天の湯を紹介すれば十分ですが、ついでに内湯も簡単に紹介しておきましょう。内湯は略図でもわかる通り、本館の左右に配置されていて、右側の内湯の脱衣場は露天の脱衣場を兼ねています。左側の内湯は道路側ですが、岩手山や雲海がよく眺められます。



岩手山の左に雲海が眺められる

とりあえず女湯を除いて、すべての湯船のハシゴをしました。夕食後は満天の星を眺めながら誰もいない湯船にのんびりと浸かろうと思っ
ていました。しかし、夕食時に呑んだ酒がよく回って、布団に横になっ
たとたん知らず知らずのうちに熟睡
してしまいました。

秋田駒ヶ岳と乳頭温泉

雲一つない青空が広がっています。今日は秋田駒ヶ岳に登る予定ですが、絶好の登山日和です。藤七温泉から順調に山道を下ってゆくと、道路脇に三人の女性が座り込んでいます。私と同世代の秋田美人ですから、気軽に声をかけてみました。

女性たちはいまが旬の根曲竹を採りに来たのです。根曲竹はクマザサの一種でチシマザサという人の背丈ぐらいの笹のタケノコです。タケノコといえは山梨ではもっぱら孟宗竹の太いタケノコですが、根曲竹は長さが十〜二十センチぐらい、太さ一〜二センチぐらいの小さなタケノコです。

根曲竹は、いまの季節にはこの宿でも必ずといっていいほど食膳に並ぶ人気の山菜です。



生のものを焼いたり、みそ汁や鍋料理の中に入れてたり、煮物にしたり漬物にしたりして食べます。わたしは皮付きのまま焼いたあと、皮を剥いて味噌をつけて食べたのが一番おいしく感じました。えぐみがなく、ほんのりと甘く、トウモロコシのような風味を感じました。しかしいまが旬だといっても、毎晩のように根曲竹を含む山菜中心の料理にはいささか食傷気味です。

女性たちはふもとの集落で日ごろから仲良く付き合っている仲間同士で、行楽気分で行楽気分で根曲竹採りに来たのだと話してくれました。たくさんの根曲竹は下茹でした後、塩水に漬けて瓶詰め保存するそうです。こうしておけば、一年中いつでも、いろいろな料理に利用できるといふことでした。



さて、いつまでもおしゃべりしているわけにはいきません。今日の宿の乳頭温泉までは九十三キロ、およそ二時間半の行程です。

乳頭温泉のすぐ近くにある秋田駒ヶ岳（一六三七m）は十和田八幡平国立公園の南端に位置し、秋田県の最高峰です。駒ヶ岳という名前の山は、全

国にいくつもあり、春先の山肌に残る駒形の雪が、ふもとの村人の農作業の目安となり、駒ヶ岳と呼ばれてきたといひます。

駒ヶ岳の中で最高峰は、わが山梨の甲斐駒ヶ岳（二九六七m）ですが、秋田駒ヶ岳は「花の百名山」に選ばれて



東北の火山(気象庁)



秋田駒 八合目駐車場

おり、季節を追って約三百種類もの高山植物が咲き競う花の名山として知られています。

また秋田駒ヶ岳はいままで登ってきた岩木山、八幡平と並んでまだ活動中の火山ということにも注意しておかなければなりません。昭和四十五年にマグマ噴火したばかりです。気象庁

では、地震計を設置し、火山活動の監視を行っていますが、いまのところ警戒レベル1で、静穏な状態を保っています。しかし数年前に警戒レベル1の木曾の御岳山が噴火して登山中の六十三人の死者行方不明者をだしたことを忘れてはいけません。気象庁の警戒レベルは経験と勘に基づくもので、火山はいつ爆発するか分かりません。登山といっても八合目（一三〇〇m）まで車道が伸びていますから、高度差三五〇メートルほどを登るだけです。八合目の駐車場は旧日本窒素肥料（現在のチッソ）の工場があった跡です。登山道の入口から少し進んで小さな沢を渡ると、硫黄の露天掘りした跡がありました。

硫黄はかつて火薬やマッチなどの原料として利用されました。また化学工業上も重要な原料で、合成繊維、医



硫黄採掘跡

薬品、農薬などの原料として「黄色いダイヤ」とも呼ばれていました。

しかし一九六〇年代後半以降は、亜



硫酸ガスによる四日市ぜんそくなど深刻化する大気汚染防止のため、石油精製工場において脱硫装置の設置が義務付けられたことで、脱硫工程の副生成物として得られる硫黄の生産が活発化し、硫黄鉱石の需要は完全になくなっていきました。

硫黄鉱山跡辺りから矮小化された背の低い樹林帯のなかの登りになります。標高一四〇〇メートルあたり



で高山帯の植生を見せるのは、雪の多さと冬の気候の厳しさをうかがわせます。

谷筋にはまだ大きな雪渓が残っていましたが、足を滑らせると下まで一気に落ちかねないので、ストックを使っ



遠く岩手山を望む

て慎重に渡ります。
ここを過ぎて片倉岳の北面に回り込むと、八幡平から眺めた岩手山が遠くによく見えます。昨日は北か



片倉岳展望台から男女岳山頂を望む

ら、今日は反対の南から眺めていることになります。ここから岩手山や八幡平までは尾根筋の縦走路があって、三泊四日の山旅だそうです。

一時間ほどで、一四五六mの片倉岳展望台に着きました。ここから秋田駒ヶ岳の最高峰・男女岳（おなめ岳）のたおやかな山容が手に取るように眺められます。秋田駒ヶ岳は本峰の男岳、火口丘の女岳、寄生火山の男女岳からなる複式火山の総称です。

男女岳と書いて、なぜおなめ岳なのか、「おなめ」が耳慣れない言葉なので調べてみました。ちょっと苦労しましたが、古語辞典に解説の糸口を見つけました。以下は私の想像です。男岳（一六二三m）のすぐ近く、真南に女岳（一五一三m）があります。男岳と女岳で夫婦一对で、めでたしめでたしといたいところですが、男岳の北東近くにもうひとつ同じぐらいの高さの山があります。

誰が名付けたかは分かりませんが、「あの山の名前はなんじゃ」と聞



かれたときに、そのたおやかな山容からおもわず「あれは妾じゃ」と答えた人がいたのでしょう。「おなめ」はもと「おんなめ（妾）」の「ん」の無表記形であると古語辞典には出ています。日

本書紀の景行四〇年に「時に王に従ひまつる妾(ヨムナメ)有り。弟橘媛と曰ふ」と例文が示されています。

余計な寄り道をしてしまいました。が、秋田駒ヶ岳はここからが本番です。男女岳に登るのには、片倉岳展望台から男女岳の西側の山腹を等高線沿



いに回り込むように進み、阿弥陀池の脇から登ります。阿弥陀池の手前の草原には木道が設置されています。

このあたりから阿弥陀池にかけての草原は通称「お花畑」と呼ばれ、いろいろな高山植物が咲き誇る天上

の楽園ともいえる場所です。秋田駒ヶ岳に自生するほとんどの高山植物がここで見られますが、今回とくに感激し、心を奪われたのはチングルマの大量群落です。チングルマの名前の由来は、花の盛りではわかりません。花が終わ



秋の花が散った後のチングルマ



ったあとの姿が「稚児車」(風車)に似ていたことから付けられたといわれています。

草のように見えますが、地面を這う

ように枝を伸ばし群落をつくる低木です。厳しい風や豪雪に耐えるため、丈はみな低く、短い夏の間に一斉に開花し、実をつけなければなりません。雪が消えると早速、成長を始める代表的な雪田植物です。雪溪の周囲で大群落をつくるチングルマの花畑はいつ



ミヤマキンバイ

までも眺めていたいほど見事な美しさです。一年に二週間ほどしか現れない八幡平のドラゴンアイと秋田駒ヶ岳のチングルマの大群落は今回の旅の二大ハイライトといえるでしょう。お花畑ではチングルマの他にイワカガミ、ミヤマキンバイ、ミヤマダイコンソウ、カネスミレ、ヒナザクラ、イワウメ、シラネアオイなどが見頃を迎えていました。

阿弥陀池は雪解けの水を豊かにたたえ、外輪山の男岳、横岳の姿を水面に映しています。信仰の対象としての秋田駒ヶ岳は男岳です。山頂には鳥居とお社が建っています。しかし標高は男女岳よりも十四メートル低い。本来ならまず男岳に登ってお社に参拝し、そのあとに最高峰の男女岳に登るところですが、二つ登るのはさすがに厳しい。結局、最高峰の男女岳に登るこ



男岳と阿弥陀池

とにしました。

阿弥陀池から男女岳を見上げると、丸太を組んで作られた階段が山頂まで続いています。斜面が土砂崩れを起



こすのを防止するためでしょう。阿弥陀池から山頂までは二十分ほどです。山頂からは間近に男岳と女岳が眺

められます。男岳の山頂には、よく見ると鳥居と祠のような構造物が見えます。帽子を脱ぎ、そちらに向かって遙拝しました。

女岳は昭和四十五年から四十六年にかけてマグマ噴火したばかりですから、山頂部は植生もまばらです。火口の形もはっきりと分かり、こちらの方がどちらかといえば男岳にふさわしい荒々しい様相を呈しています。

男岳の右側遠くには田沢湖の湖面が陽の光を浴びて光っています。

民族学者、柳田国男によれば、農民は古くから山を神とみなしてきました。春になって田植えの時期になると山の神は里に下りてきて田の神になり、豊作をもたらします。そして秋になると山に帰って再び山の神になると信じられてきました。

秋田駒ヶ岳がいつ頃開山されたの



かは分かりませんが、神社とその祭神の名を記した平安時代の延喜式神名帳を調べてみると、秋田駒ヶ岳神社の記載があります。

秋田駒ヶ岳は、恐らく地元によくか



オオバキスマレ

ら伝わる信仰をもとに密教の行者たちによって開かれたのでしよう。阿弥陀池の名前にもその名残があります。

秋田駒ヶ岳は国の天然記念物に指定された見事なお花畑と、外輪山、火口丘、カルデラ、さらに外輪山の外側にある寄生火山など珍しい火山地形に感激しました。またすばらしい展望もあって「東北の名山」と呼ばれるにふさわしい山でした。

今日の宿として予定していた乳頭

温泉鶴の湯には、下山後の午後二時ごろ、八合目の駐車場から電話の予約を入れました。電話に出た宿の方が最初は「部屋は空いてるが、いまからだ食事の準備ができない」と難色を示していました。しかし近くまで来ていることを告げると、しばらく待たされた後、「厨房と相談しました。どうぞおいでください」と愛想よく受け入れてくれました。

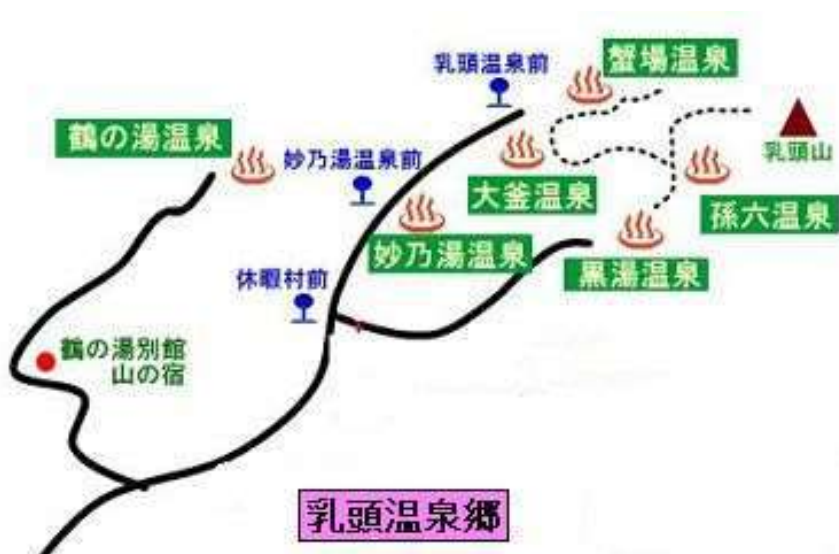
「乳頭温泉郷」は秋田駒ヶ岳と尾根続きの乳頭山（一四七八m）の麓に点在する七か所の温泉の総称です。乳頭山は山の形を、乳房を伏せた形に見立ててつけられたものです。

「鶴の湯温泉」、「妙乃湯温泉」、「黒湯温泉」、「蟹場温泉」、「孫六温泉」、「大釜温泉」、「国民休暇村田沢湖」がそれぞれ、それぞれ泉質が違ふといえます。

乳頭温泉郷のような火山性温泉は

豊富な泉質を生みだします。多種多様の泉質を味わえる楽しみがあります。

乳頭温泉はいまや全国有数の人気温泉地です。かつて温泉の専門家百人による「魅力的な温泉地」のアンケート





で乳頭温泉は草津を抑え、堂々の一位になりました。なかでも鶴の湯の人気は高く、また一番古くからある温泉宿です。元禄時代には庶民相手の湯宿として営業していた記録が残っているといえます。

新型コロナウイルスの緊急事態宣言を受けて休館中でしたが、六月十五日から営業を再開したばかりだということでした。後から知ったことですが、この鶴の湯は温泉好きの人たちの垂涎の的で、通常ならば半年前でも予約が取れるかどうかという人気宿だそうですから、当日予約ができたのはコロナ禍のおかげです。

写真の左側の建物は「本陣」と呼ばれており、鶴の湯のホームページによれば「秋田藩主二代目の佐竹義隆公が湯治に訪れた際に警護の者が詰めた建物としていまでは鶴の湯を代表する建物となっています」とのこと。

余談ですが、現在の秋田県知事の佐竹敬久（のりひさ）は佐竹家の末裔で二十一代目にあたります。大学の工学部の同級生でしたが、県庁職員や秋田市長などを務めたのち知事になりました。

それはさておき、宿の入口ともいえる冠木門から宿の方を眺めると、一本の街道を挟んで両側に家並が連なる宿場町のような感じを受けま



す。向こうから助さん角さんを従えた水戸のご老公や縞のカッパに三度笠の木枯し紋次郎がやってきそうな雰囲気です。佐竹の殿様が駕籠に乗って到着しても不思議ではありません。

宿の説明によれば「本陣」は四百年近く経っていることになりすが、江戸時代の秋田藩主が訪れた時と同じ建物にはとても見えません。宿の女将に聞いてみると、明治時代に建て替えられたものだそうです。恐らくその後も何回にもわたって改築されているに違いありません。ホームページの説明では江戸時代のままだと思ひ込む客もあるのではと指摘しておきました。

寄棟の茅葺き屋根は、刈り取ったススキを一冬寝かせたのち、茅手（かやで）と呼ばれる職人の手によ



って昔ながらの葺き替えが行われているそうです。間口十五間、奥行き三間という大きな建物ですから、使われる材料や手間は大変な量でしょう。

屋根の上に三角形に突き出した部分がありますが、煙り出しです。その下の床に囲炉裏が切っただけです。外壁は豎板張で、内部には鉾（ち

ような）仕上げの梁を架け渡して、風趣に富む湯治場の雰囲気をよく伝えていきます。

石を積んだ土台にも注目しました。恐らく深い積雪や春の雪解けの難を避けるために、建物を周囲から高くしたものと考えられます。江戸時代からの伝統建築物を継承しながら、現代の利用にも耐えられるように変えていくやり方には好感が持てます。

本陣と通路を挟んで向かい合っている建物は宿泊棟（三号館）です。本陣は大名や旗本、勅使や宮さまが泊まる場所ですから、わたしのような庶民が泊まる場所ではありません。わたしが二泊したのは二階の角部屋の六畳間でした。もちろん風呂と便所はなし、テレビもありませんが、一泊二食付きで九千六百円とりズナブルで、布団を自分で敷いた

ら二百円負けてくれました。また山奥の一軒宿にもかかわらず、かなり高速のWiFiが使えて、旅行中に溜まっていたメールの返信などを一挙に済ますことができました。さて何はさておき、全国に知られた名湯をじっくり堪能することにした



ら



湯の川の向こう側に黒湯と白湯

しよう。まず向かったのは男女混浴の露天風呂です。写真の右手に木造の湯小屋があり、脱衣場と内湯があります。この露天風呂には内湯を経由して入るようになっています。女性専用の脱衣場と内湯も隣にあり、同じく内湯を経由するので男女混浴とはいえ女性も入りやすいのではないのでしょうか。



男女混浴露天

それに結構な深さがありますので、中腰になれば首から下は濁った湯に隠れて見えません。誰もいない広い湯にゆったりと体

を沈めれば、すべすべした湯が皮膚にまわりついてくるように感じます。浴槽の底は砂地のままで、湯が湧き出してきているようです。少し青みかかった白濁した湯は、体温と同じぐらいの泉温なので、長湯が大好きなわたしにはぴったりにです。

脱衣場にあった分析表によれば泉質は含硫黄・ナトリウム・カルシウム塩化物・炭酸水素泉で、泉温は三十九・四度Cということでした。

炭酸水素泉というのは簡単にいえば、重曹の温泉のことです。重曹には皮脂の汚れを落とし、血行を促進する効果があるので入浴剤の主成分として使われています。乳白色になるのは含まれている硫黄成分やカルシウム成分のためです。

次に向かったのが白湯と黒湯の内湯です。湯の沢に架けられた木の橋を

渡ると風情たっぷりの湯小屋があります。鶴の湯には敷地内に四つの異なる源泉があるといいますが、贅沢この上ありません。

泉質は露天風呂とほとんど変わりませんが、こちらの方が少し熱めです。恐らく冬場にはこの白湯が適温に感じられるはずで、湯口から流れ出る湯を手のひらで掬って飲んでみましたが、わずかな塩味と硫化水素のにおいがしました。



黒湯



女性専用露天風呂

脱衣場の反対側には同じぐらいの広さの黒湯がありました。裸のまま行き来できるので、そちらも入ってみました。わたしには白湯と黒湯の泉質の区別はつきませんでした。黒湯も白湯と同じように白濁した湯です。

白湯と黒湯のある湯小屋の奥には女性専用の露天風呂があることは宿の入浴案内図で分かっていました。

いくら女性客の姿を見かけないからといって、わたしが入るわけにはいきません。しかし誰もいないのを確かめて、素早く写真だけ撮らせてもらいました。

食事は「本陣」でいただきます。内装はきれいに改装されており、畳の間に脚付きのお膳が用意されていました。新型コロナの感染防止のためか、膳と膳の間は二メートル近い距離が取られています。

真ん中にご飯を入れたお櫃がありますが、「お客様ご自身でよさうのはご遠慮ください。従業員に任せてください」と言われました。これも感染防止対策でしょう。

秋田県の感染者は十万人に一人ぐ



らいで、首都圏に比べれば少ないのですが、県外からの客もあることから神経質にならざるを得ないのでしよう。営業を再開するにあたって、保健所からこのような感染防止対策を実施するように求められたということです。

しかしわたしが泊まった日は営業

を再開したばかりということもあって、十組ほどの客しかおらず、密になる心配はありません。

お膳の上を見てください。今日も出ました、根曲竹です。マヨネーズが添えてある生のものが一品、揚げたものが一品です。その他には、ワラビ、ハスなどの山菜とイワナの塩焼きです。イワナは囲炉裏で炭火焼





きしたものです。毎晩のように山菜攻めでいささか食傷気味ですが、しやきっとした採りたての根曲竹の触感を楽しみながら、湯上りのビールを堪能しました。



大野源次郎撮影

「陣屋」は昔から食事場所として利用されてきました。一間が二十畳ほどもある畳敷きの座敷は、食事が終われば宴会の場所に早変わりしたようです。秋田市に「東北の自然、歴史、民俗を耕す」がうたい文句の無明舎という小さな出版社があります。帳場に「秋田の温泉」という写真集がありましたので手に取ってみました。「湯治の宴：鶴

の湯（撮影：大野源二郎）」という昭和初期だと思われる白黒の写真を見つめました。中央に浴衣姿の男が鉢巻きを締めて、手つきよろしく踊っています。唄も歌っているようです。周りの人たちは手拍子でそれを囃しています。もう一枚の写真は屋外のようにですが、腰の曲がった老婆が踊っています。みんなの笑顔が底抜けに明るいのが印象的です。

かつて農村では田植えの後の泥落とし、刈り入れの後の骨休め、冬の農閑期には「命の洗濯」と称して湯治に出かけました。湯治場は農家の人たちにとって農作業の疲れをいやす場と共に社交場でもあった

のです。

日本温泉文化研究会 『湯治の文化



誌』によれば「広場に舞台をつくり、

でしょう

百人以上の湯治客が演芸会をやった
といえます。客の中には、尺八、笛、
三味線、踊りなどの芸達者な人や民謡
のうまい人が多く、舞台上上がる人も
見物客も一体となって、どぶろくを飲
んでは歌い夜遅くまで騒いだ」とあり
ます。

日本は世界一の火山大国です。陸地
にある火山の七分の一が日本列島上
にあるといえます。火山は地震や噴火
など時には大きな災害をもたらしま
す。

車が発達するまでは、湯治客たちは
鍋釜、ふとん、米、味噌などを背負っ
て奥深い山道を歩いてきたといいま
す。貧しい農民にとって、年に一度の
湯治は最高の贅沢だったのでしょう。

しかし、火山はまた温泉という豊か
な恵みも日本人に与えてくれました。
記紀や各地の風土記にも温泉の記述
は見られます。温泉は歴史以前から湧
いていたものであり、日本人は古くか
らすで温泉を利用していたという
ことが分かります。

鶴の湯は勤助という地元の猟師が
猟の際に傷ついた鶴が湯で傷を癒す
のを見つけたことが名前の由来にな
っているといえます。農民たちは傷つ
いた鶴が翼を癒すようにこの湯治場
に集まり、ひと時の安楽ののち、また
辛く厳しい農作業に戻っていったの

鶴の湯の滞在は、日本人にとって温
泉とは何か、湯治の歴史はどんなもの
だったのかという疑問をわたしに抱
かせてくれました。旅から帰ったあと、
「湯治」の歴史を調べてみようという
気になったのは、みちのくの素朴な温
泉のおかげです。

エピローグ・旅を終わって

わたしの旅は乳頭温泉からまだ続きます。秋田では角館の武家屋敷の街並み、縄文遺跡として有名な大湯環状列石遺跡を見学しました。山形では山寺立石寺に立ち寄り、蔵王連峰の最高峰の熊野岳（一八四一m）にも登りました。しかし、これ以上書いても冗長になるだけだと思います。すでにわたしの東北の旅の雰囲気は皆さんに十分に伝わったと思います。

私は今回の東北の旅を通じて、日本の自然の美しさを再認識しました。とくにわたしの胸に響いたのは、新緑の森と雪解け水の流れる川の美しさです。新緑の梢から漏れてくる光のやさしさ、初夏の光に水面を輝かせながら流れてゆく透明な川。そこには厳しい冬を耐えてきた東北の命が、一斉に躍動していました。

また岩木山、八幡平、岩手山、秋田駒ヶ岳、蔵王熊野岳、那須岳などの火山とその山麓に沸く温泉の恵みにも感謝しなければなりません。

わたしはここ十数年、世界中の沙漠の旅を続けてきました。温暖で湿潤な日本の対極にある乾燥の風土への旅こそが世界の多様性を知ることにつながると思ったからです。

日本の思想と西洋の哲学の融合を目指した哲学者・和辻哲郎は、その著書『風土―人間学的考察』の中で次のように述べています。

「人間は必ずしも自己を自己において最もよく理解し得るものではない。人間の自覚は通例他を通ることによって実現される」

青い空に消えるまで果てしなく続く砂と岩のうねり、強烈な日射と不気味な竜巻、地平線に沈む真っ赤な

太陽。沙漠のスペクタクルは、むせ返るような緑に埋まる日本の風景とはあまりにも異質でした。

当たり前だと思っていた緑豊かな森、途絶えることのないきれいな流れ、そんな日本の自然が奇跡であることに気づくには、沙漠の中で一週間も過ごせば十分です。

そしてわたしは今回の旅を通じて、日本の自然の最良の部分に触れることができました。東北の自然と文化が、近代化の中で失われることなく、いつまでも続くことを切に願っています。

二〇二〇年七月十一日

川崎光洋